

行政院國家科學委員會專題研究計畫 成果報告

日語中的「モノ」與「コト」－尋求日本語學與哲學的接 點 研究成果報告(精簡版)

計畫類別：個別型
計畫編號：NSC 100-2410-H-004-179-
執行期間：100年08月01日至101年07月31日
執行單位：國立政治大學日本語文學系

計畫主持人：吉田妙子

計畫參與人員：碩士班研究生-兼任助理人員：江俊賢

公開資訊：本計畫涉及專利或其他智慧財產權，2年後可公開查詢

中華民國 101 年 11 月 27 日

中文摘要： 日語裡頭，存在著連續性。即使是單純的自他動詞，在其兩種形式之中存在著多樣的表現。本研究試圖用哲學的思維去解析，得到了比純粹的文法解釋還要更合理的說明方式。背後動作者意識的有無、是自人而然的發生，還是意圖性的行為等等，都是影響文法表現(語學)的重要因素。

中文關鍵詞： 自他動詞 脫使役化 反使役化 連續性 意志性

英文摘要：

英文關鍵詞：

日本語の変則的有対動詞 — 「見つける—見つかる」を中心に—¹

キーワード：「見つける—見つかる」，語彙概念構造，脱使役化，反使役化，使役欠如，経験者

1. はじめに

生成文法においては，動詞は通常，対格動詞（「落とす」などの他動詞），非対格動詞（「落ちる」など非意志性の自動詞），非能格動詞（「歩く」など意志性の自動詞），能格動詞（「（扉が）ひらく／（扉を）ひらく」など自動詞としても他動詞としても機能する動詞）の4種類に分けられている。この分類によって，様々な問題が解決できる。例えば，「勉強する／勉強をする」「崩壊する／*崩壊をする」という例において，漢語サ変動詞にヲを挿入することができるかどうかは，漢語サ変動詞が意志的動詞である場合は可，非意志的動詞である場合は不可，という判定ができる（長谷川 1999）。

また，動詞の内部構造については，語彙概念構造（LCS：Lexical Conceptual Structure）が有効である。例えば，対格動詞「折る」と非対格動詞「折れる」の一般的な語彙概念構造は次のようである。

(1) 「折る」 [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

x : Agent y : Theme z : 結果状態

x が y に働きかけたことが原因して，y が z（折れた状態）という結果状態になる。

「折れる」 [BECOME [y BE-AT z]]

φ : Agent y : Theme z : 結果状態

y が, z (折れた状態) という結果状態になる。

これを利用すると, さまざまな文法問題が解明できる。例えば, 「枝を折る」と「鶴を折る」の「折る」は, 語彙概念構造が全く同じである。しかし, 「枝を折る」においては y が「枝」で z が「折れた状態」であるのに対し, 「鶴を折る」においては y は「折り紙」であり, 結果状態 z が「鶴」である。つまり「〈Theme〉を折る」には 2 種類あって, 「枝を折る」と言う場合には働きかけの対象 y が「Theme (枝)」そのものであるが, 「鶴を折る」と言う場合には結果状態 z が「Theme (鶴)」になるのである。「枝を折る」の「折る」は破壊動詞であるが, 「鶴を折る」の「折る」は作成動詞ということになる²。

動詞「見つけるー見つかる」も, 典型的な有対動詞と見なされている。通常の LCS 処理に従えば,

(2) 「見つける」 [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

x : Agent y : Theme z : 結果状態

x が y に働きかけたことが原因で, y が z (見つかった状態) という結果状態になる。

「見つかる」 [BECOME [y BE-AT z]]

φ : Agent y : Theme z : 結果状態

y が, z (見つかった状態) という結果状態になる。

となるはずである。しかし, 「見つける」の場合, 動作主の動作は「見えない対象を眼に触れるようにする」ことであり, 直接「見えない対象」そのものに働きかけることはできないはずである。故に, [x ACT ON y] の部分の y は見えない対象そのものでなく, 見えない対象を覆い隠しているもの、ということになる。

また, 道に落ちている 100 円玉を偶然に拾った場合, ホクホクしながら発する第一声は「100 円玉、見つけた!」ではないか。これは, 動作の

中に使役部分がまったく含まれていない。他動詞が用いられているのに、脱使役化のような体をなしているのである。

従来生成文法は欧米語中心の分析方法と見なされていたが、欧米語だけでなく、日本語の動詞に対しても汎用性があると思われる。しかし、普遍言語に対し、それぞれの特殊性を持つ日本語などの個別言語において、欧米語と同様の方式で分析して片がつくものだろうか。個別言語の持つ動詞の語彙事情によって、語彙概念構造は変わってくるのではないか。その問題を、日本語の有対動詞「見つかる－見つける」の分析を通して検討したい。

2. 有対自動詞の二面性

2. 1. 非対格動詞と非能格動詞

日本語の有対動詞といえどももちろん〈他動詞－自動詞〉の対であるが、自動詞に非対格動詞と非能格動詞の2種がある以上、対にも〈他動詞－非対格動詞〉のペアと〈他動詞－非能格動詞〉のペアの2種が考えられる。それは、次の3つに整理される。

(3) 自動詞が再帰動詞の場合³

a 〈通常に対格－非対格のペア〉

(人が)(物を)隠す [Ag(ガ), Th(ヲ)] — (物が)隠れる [Th(ガ)]

(人が)(卵を)立てる [Ag(ガ), Th(ヲ)] — (卵が)立つ [Th(ガ)]

b 〈対格－非能格のペア〉

(人が)(自分を)隠す [Ag(ガ), Th(ヲ)] — ~~(自分が)~~隠れる [Ag⁴(ガ)]

(人が)(自分を)立てる [Ag(ガ), Th(ヲ)] — ~~(自分が)~~立つ [Ag(ガ)]

(4) 意志主体が意志主体に対して働きかける場合

a 〈対格－非能格のペア〉

(人が)(客を)家に入れる [Ag(ガ), Pa⁵(ヲ)] — (客が)家に入る [Ag(ガ)]

(5) 語彙的事情により、同じ動詞が〈対格－非対格〉のペアと〈対格－非能格〉のペアになることがある。

a 〈対格－非対格のペア〉

(人が)(事件を)起こす [Ag(ガ) , Th(ヲ)] — (事件が)起きる [Th(ガ)]
b 〈対格—非能格のペア〉

(人₁が)(人₂を)起こす [Ag(ガ) , Pa(ヲ)] — (人₂が)起きる [Ag(ガ)]

このように、通常の〈対格—非対格のペア〉に対して〈対格—非能格のペア〉ができる事情は、動詞が再帰性を持つ場合(3-b)と意志主体が意志主体に働きかける場合(4-a、5-b)の2つの場合、つまり、「働きかけの対象が意志主体である場合」と一般化できる。かくして非対格動詞か非能格動詞かの判定に揺れが出てくることになる。

2. 2. 脱使役化自動詞文と反使役化自動詞文

冒頭で述べた「枝を折る」と「枝が折れる」の語彙概念構造は、(1)のようになるのであった。

- (1) 「折る」 [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]
「折れる」 [BECOME [y BE-AT z]]

「折る」の語彙概念構造の前半の使役部分と後半の結果部分は CAUSE で連結されているが、「折れる」の方は使役部分を欠いている。風などの非意図的な自然力によって枝が折れる場合は、使役から逃れられる「反使役化自動詞構文」になる。しかし、意図的な動作の結果である「鶴が折れる」という場合は、故意に使役部分を表現しない「脱使役化自動詞構文」になる。(以上、影山 2000 による。) 同じ [BECOME [y BE-AT z]] の構造を持っていても、「枝が折れる」と「鶴が折れる」では動作主のコントロールの有無の違いがあるわけである。

ところが、日本語には脱使役と反使役化の際に異なる自動詞を取るものがある。例えば、「縮める—縮まる—縮む」のトリプレットである。

- (6) a スケジュールを調整して、日程を縮めた。→ 日程が縮まった。
b スケジュールを調整して、日程を縮めた。→*日程が縮んだ。

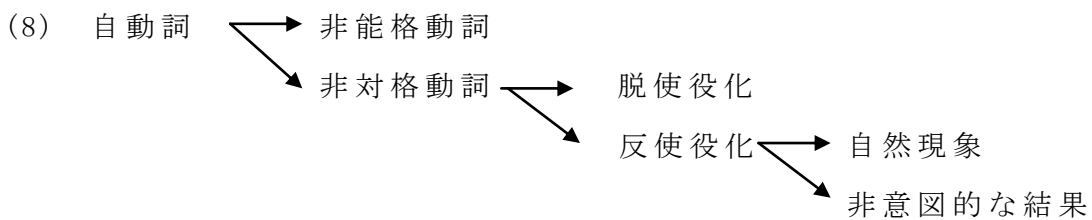
(7) a 病気で背丈が縮んだ。

b うっかり洗濯したら、ウールのセーターが縮んだ。

「縮める」に対応するのは「縮まる」であり、「縮まる」は意図的な行為の結果の自動詞文しか作れない脱使役化構文専用の自動詞である。一方、「縮む」は(7a)のような自然現象か、(7b)のような非意図的な結果か、いずれにしても動作主のコントロールの及ばない結果を表す反使役化構文専用の自動詞である⁶。それ故、他動詞「縮める」は、脱使役化専用の非対格動詞と反使役化専用の非対格動詞の2種を持っていることになる。このように、非対格動詞にも脱使役と反使役の二つの様相があるばかりか、ある対格動詞は2つの非対格動詞に脱使役化と反使役化を役割分担させて、トリプレットをなしているのである⁷。

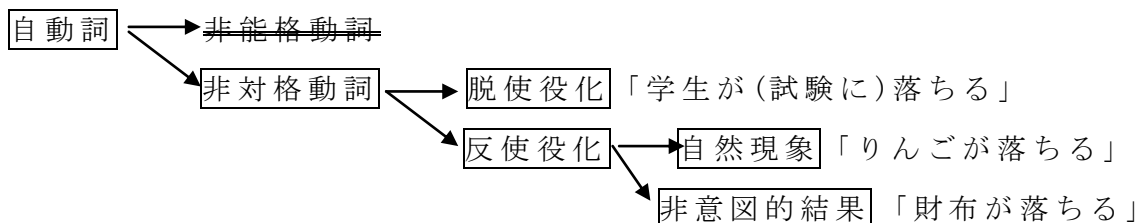
2. 3. 動詞分類のまとめ

前節をまとめると、自動詞の体系は次のように分類される。

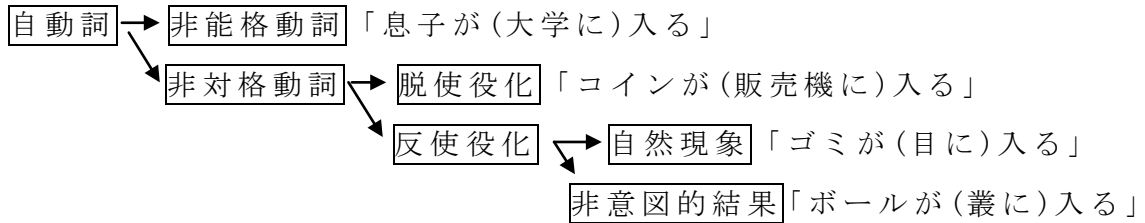


この図に従って、通常の有対自動詞「落ちる」、非能格用法と非対格用法を併せ持つ有対自動詞「入る」、トリプレット自動詞「縮む・縮まる」の体系を確認したい。(二重取り消し線は存在しない用法)

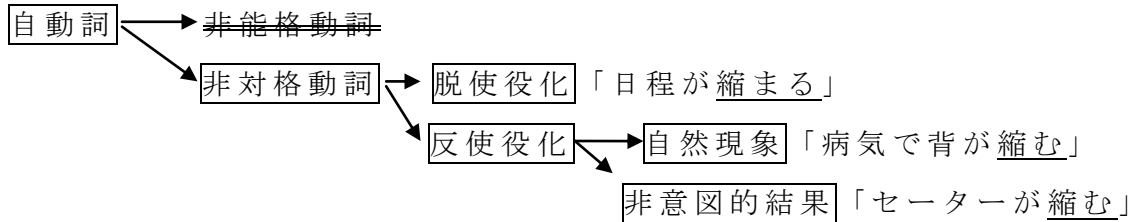
(9) 「落ちる」



(10) 「入る」



(11) 「縮む」「縮まる」



3. 「見つける—見つかる」の語彙概念構造

3. 1. 通常の〔対格動詞—非対格動詞〕のペアの場合

通常の〈対格動詞—非対格動詞〉のペアにおける有対自動詞の場合、非意図的な反使役型と意図的行為の結果である脱使役型の2種の様相があることは、前に述べた。

反使役型：「風で枝が折れた」「引力でリンゴが落ちた」の場合は、自然現象。人為的な要素はまったくないので、「風が枝を折った」「引力がリンゴを落とした」と他動詞を使うのは不自然な日本語の代表と見なされる。従って「枝が折られた」「リンゴが落とされた」のように、他動詞の受身形を使うことはできない。

脱使役型：「折り紙で鶴が折れた」「学生が試験に落ちた」の場合は人為的行為の結果で、「折る」「落とす」という他動行為の結果を示す。折る人がいなければ鶴は自然に折れるはずがなく、落とす先生がいなければ自分で落ちる学生はいない。この場合、「子供が鶴を折った」「先生が学生を落とした」と他動詞を使うこともでき、「鶴が折られた」「学生が落とされた」と受身形を使うこともできる。

3. 2. 「見つける」と他の他動詞との違い

(12)a 財布をきつと見つけてみせます。

b *財布をきつと探してみせます。

(13)a 恋人を見つけています。

b 恋人を探しています。

「財布を見つける」という行為は最終的に「財布を目に触れさせる」という結果を含んでいる。しかし、「財布を探す」という行為はポケットを探ったり、クッションをひっくり返したりする行為であり、「財布を目に触れさせる」という結果を含まない故、(12b)は正しくない。また、(13a)は行方不明の恋人を捜索しているという意味に取れるが、(13b)は「恋人捜索中」の意味にも「恋人募集中」の意味にも解釈できる。さらに、「探したけど見つからなかった」とは言うが、「*見つけたけど見つからなかった」とは言えない⁸。即ち、「見つける」は必ず「見つかる」という結果事象を含む動詞であるので、「あるかないかわからないもの」は「見つける」ことができるかどうかかわからないのである。それ故、語彙概念構造で表せば、「見つける」は使役部分と結果部分が揃った対格動詞で対象に変化を齎す変化動詞であるが、「探す」は結果部分を持たない非変化動詞ということになる⁹。

(14) 「見つかる」 [x ACT ON y'] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]¹⁰

(15) 「探す」 [x ACT ON y]

また、前述のように、有対動詞「見つける－見つかる」の語彙概念構造は一般的には(2)のようになるのであった。

(2) 「見つける」 [x ACT ON y'] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

「見つかる」 [BECOME [y BE-AT z]]

しかし、他動詞「見つける」は過去アスペクトになると自動詞「見つかる」とほとんど同義に使われることがある。

- (16) a 部屋を掃除していたら、偶然古い写真が見つかった。
b 部屋を掃除していたら、偶然古い写真を見つけた。

何故「見つける―見つかる」に限ってこうなるのか。

上の「折れる」「落ちる」の場合は、脱使役型と反使役型の動作が違うことは明らかであろう。他動詞の「折る」「落とす」は「他動性が高い他動詞」、つまり「対象に対する働きかけが大きい他動詞」なのである。言い換えれば、「対象に接触しなければ完成しない動作」である。それ故、「折る」「落とす」などにおいて、[−コントロール]の反使役型と[+コントロール]の脱使役型では、動作の有りようが違う。

これに対して、「見つける」は「他動性が低い他動詞」、つまり「対象に対する働きかけが小さい他動詞」「対象に接触しないで完成する動作」「見るだけで完成する動作」である。（「見る」も他動性が低い動詞である。）そこで、コントロールの有りようの差異が少なく、反使役型と反使役型の差異があまり目立たなくなる。つまり、他動性が低い故、自動詞の働きと一部重なる用法が出てくるかのように見えるのではないだろうか。以下、そのことを検討する。

3. 3. 「見つかる」と「見つける」

ここで、「見つかる」の用法を以下のように整理したい。

- (16) a 部屋を掃除していたら、偶然古い写真が見つかった。

などのように、意図していなくても見つかるという例がある。また、考古学者が探したのではなく農夫が偶然に発見したという邪馬台国の「漢倭奴国王」の金印が発見された時も、

(17) 卑弥呼に与えられた金印が見つかった。

と言われたであろう¹¹。「非意図的な事象」の「見つかる」は、「人の眼に触れないでいたものが偶然眼に触れるようになる」ということである。この場合、「見つけられた」と受身形を使うのは不自然である。この用法は、反使役型の用法に該当するものと考えられる。

(18) a 探していた財布がやっと見つかった。

b (かくれんぼで) あーあ、見つかった。

以上は明らかに「意図的な行為の結果」, 「見つける」行為あつての「見つかる」である。それ故, 「私が財布を見つけた」「鬼が私を見つけた」と他動詞を使うこともできるし, 「財布が見つけられた」「あーあ、見つけられちゃった」と, 他動詞の受身形を使うこともできる。これは、脱使役型の用法に該当するものと考えられる。

(19) a *あつ, 100 円玉見つかった!

b あつ, 100 円玉見つけた!

道で偶然にお金を拾った時に発する第一声が(14)aでなく(14)bであるのは、何故であろうか。今まで人の眼に触れていなかった100円玉が私の眼に触れるようになったのだから、「古い写真が見つかった」「邪馬台国の金印が見つかった」と同じように「100円玉が見つかった」と言ってもよさそうなものである。

しかし、「古い写真」「邪馬台国の金印」と「100円玉」は事情を異にする。「古い写真」「邪馬台国の金印」はもともと部屋や農地に厳然と存在していたものが、ただ忘れられていたり気がつかれていなかったりしただけで、ある時に忽然と人前に姿を現したものである。もし、写真のことを思い出したり考古学者が金印のことを知っていたりしたら、それらは血まなこで探す対象になっていただろう。

これに対して「100円玉」は以前から同じ場所にずっとあったわけではなく、いつも落ちているわけではない。存在しているかどうかわからないものは探す対象になり得ないので、「見つかった」は使えないのである。また、語用論的な理由として、「100円玉見つけた」という人には「私が見つけたんだから私のものだ」という所有権主張の意識があるだろう。それ故、ことさら他動詞を使って「（私が）見つけた」と言うのではないだろうか。

しかし、探す対象になり得ないものなのに、なぜ「見つけた」と言えるのであろうか。それを次節以下、語彙概念構造によって説明する。

3. 4. 「見つける―見つかる」の定義と語彙概念構造

以上のことから、「見つける」「見つかる」の用法を次のように分類したい。

「見つける」

(12)a 財布をきつと見つけてみせます。[使役完備型]

(以前から存在していたが急に眼に触れなくなったものを、眼に触れるようにする。)

(19)b あっ、100円玉見つけた！[使役欠如型]

(16)b 部屋を掃除していたら、偶然古い写真を見つけた。[使役欠如型]

(それまで眼に触れていなかったものが、偶然眼に触れるようになる。)

「見つかる」

(18)a 探していた財布がやつと見つかった。[脱使役型]

(以前から存在していたが急に眼に触れなくなって探していたものが、眼に触れるようになる。)

(16)a 部屋を掃除していたら、偶然古い写真が見つかった。[反使役型]

(17) 卑弥呼に与えられた金印が見つかった。[反使役型]

(以前からずっと存在人の眼に触れていなかったものが、偶然人眼に触れるようになる。)

このように、「見つかる－見つける」の特殊性は、他動詞「見つける」の一部の用法に使役部分を欠いた「使役欠如型」が見られ、それと自動詞の「反使役型」との境界が模糊としていることである。しかし、この「見つける：使役欠如型」と「見つかる：反使役型」の違いは、語彙概念構造にはっきりと現れてくる。

まず、通常の有対動詞である。

(20) a 子供が鶴を折った。 [他動詞]

[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

(Agent[x] が Theme[y]に働きかけた結果、y が z の結果状態になる。)

b 風で枝が折れた。 [自動詞・反使役型]

[BECOME [y BE-AT z]]

(Theme[y] の結果状態 z だけが焦点。)

c 鶴が折れた。 [自動詞・脱使役型]

~~[x ACT ON y]~~ CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]¹²

(Theme[y]の結果状態 z が焦点だが、背景に Agent[x] の y に対する働きかけがある。つまり、使役部分 [x ACT ON y] が背景化している。)

次に、「見つける－見つかる」である。

(12) a 財布をきつと見つけてみせます。 [他動詞・使役完備型]

[x ACT ON y'] CAUSE [BECOME [y BE-BEFORE x]]

(Agent[x]が Theme[y]を探す行為をし、その結果 y が x の目の前に現れる。)

(19) b あっ、100円玉見つけた！ [他動詞・使役欠如型]

[x EXPERIENCE [BECOME [y BE-BEFORE x]]]

(Experiencer[x]¹³が、目の前に Theme[y]が出現した状態を経験する。)

(18)a 探していた財布がやっと見つかった。 [自動詞・脱使役型]

~~[-x ACT ON y'] CAUSE~~ [BECOME [y BE-BEFORE x]]

(Theme[y]が発見されたことが焦点だが、背景に Agent[x]が y を探す行為がある。即ち、使役部分 [x ACT ON y] が背景化している。)

(17) 卑弥呼に与えられた金印が見つかった。 [自動詞・反使役型]

[BECOME [y BE-BEFORE x]]

(Theme[y]が不特定の Experiencer[x]に発見された状態だけが焦点。)

4. 有対動詞「見つける－見つかる」の特殊性

4. 1. 「見つける－見つかる」の語彙的特殊性

以上のことから、次の結論が導き出される。

まず、「見つける－見つかる」のペアの一部は、他の有対動詞のペアと相似的である。

[他動詞]

(20)a 子供が鶴を折った。

[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]

(12)a 財布をきつと見つけてみせます。 [使役完備型]

[x ACT ON y'] CAUSE [BECOME [y BE-BEFORE x]]

[自動詞・脱使役型]

(20)c 鶴が折れた。

~~[-x ACT ON y'] CAUSE~~ [BECOME [y BE-AT z]]

(18)a 探していた財布がやっと見つかった。

~~[-x ACT ON y'] CAUSE~~ [BECOME [y BE-BEFORE x]]

[自動詞・反使役型]

(20)b 風で枝が折れた。

[BECOME [y BE-AT z]]

(17) 卑弥呼に与えられた金印が見つかった。

[BECOME [y BE-BEFORE x]]

しかし、他の有対動詞と異なる語彙概念構造を持つ用法もある。

(19)b あっ、100円玉見つけた！ [他動詞・使役欠如型]

[x EXPERIENCE [BECOME [y BE-BEFORE x]]]

つまり、この用法の「見つける」は、経験者項を持っていることになる。これは、如何なる語彙事情によるものか。Experiencerが介在するとはどういうことか。

自然現象において「枝が折れた」というのは、観察者が存在しようとしまいと、客観的に生起する事象である。しかし、「古い写真」「金印」「100円玉」が人の眼に触れるようになるという事象は、観察者がいない限りは成立し得ない。隠れていたものが顕わになっても、誰にも気づかれなかったり、現れたものの価値がわからず素通りされていたりしたら、「見つかった」とは言えない。つまり、発見者のコントロールの有無に関わらず、発見者の目に留まらなければ「見つかる」ことはあり得ない。意図的な行為の結果であれ偶然の結果であれ、「見つける－見つかる」の行為の背後には必ず「someone experience」という表象が伴い、誰かの経験に裏付けられているのである。

従って、(16a)(17)の語彙概念構造をより正確に表わすなら、次のようになるであろう。

(16)a 部屋を掃除していたら、偶然古い写真が見つかった。

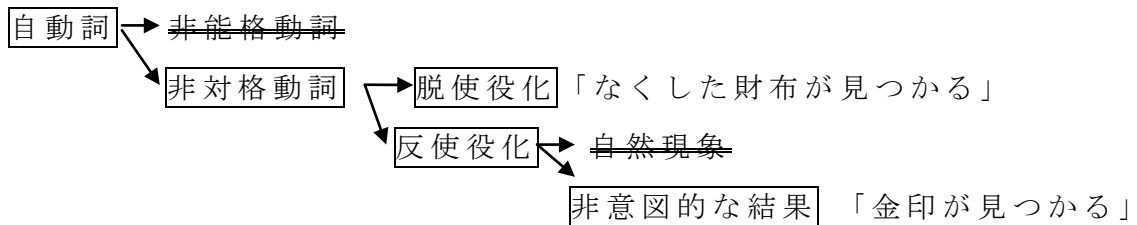
(17) 卑弥呼に与えられた金印が見つかった。 [自動詞・反使役型]

~~— [x EXPERIENCE [BECOME [y BE- BEFORE x]]] —~~

(19)b「100円玉見つけた」の場合は[x EXPERIENCE]の部分が前景化しており，(16a)(17)の場合は[x EXPERIENCE]の部分が背景化していることになる。

2.3の(8)に基づけば，自動詞「見つかる」の体系は次のようになる。

(21)「見つかる」



通常の有対動詞と違い，「物の動き」を現す純然たる自然現象は「見つかる」には存在しない。発見者が介在せずして「見つかる」という現象があり得ない以上，自然現象は生起しないのである。これは，通常の有対自動詞「落ちる」「入る」「縮む・縮まる」などと比べると，かなり不規則な体系であることがわかる。これが，「見つかる－見つける」が通常の有対動詞の語彙概念構造と決定的に異なる構造になっている原因であろう。

また，(19)bの「見つける」は他動詞であるにもかかわらず，その語彙概念構造は使役部分を持たない。これでは生理動詞と同じ構造であり¹⁴，他動詞としての意味述語の体をなしていない。しかし，このように通常の語彙概念構造と異なる構造になってしまう動詞は，日本語にはこの他にも多く存在すると思われる。

4.2. 「見つける－見つかる」の構文的特殊性

「見つかる」という自動詞はそのまま「見つける」の語彙的受け身になっており，〈他動－自動〉の関係がそのまま〈能動－受動〉の関係になっていることに気づく。

- (22) 「Agent が Theme を見つける」 → 「Theme が Agent に見つけられる」
（警察が犯人を見つける） （犯人が警察に見つけられる）
「Agent が Theme を見つける」 → 「Theme が Agent に見つかる」
（警察が犯人を見つける） （犯人が警察に見つかる）

しかし、通常の有対他動詞と自動詞の関係はそうではない。

- (23) 「Agent が Theme を落とす」 → 「Theme が Agent に落とされる」
（先生が学生を落とす） （学生が先生に落とされる）
「Agent が Theme を落とす」 → 「*Theme が Agent に落ちる」
（先生が学生を落とす） （*学生が先生に落ちる）

さらに、「見つける－見つかる」は他の〈動詞－語彙的受け身動詞〉のペア「教える－教わる」「授ける－授かる」「預ける－預かる」などと形態的に一致する。しかし、「見つける－見つかる」のペアがガ格とヲ格の交替を有するのに対し、「教える－教わる」「授ける－授かる」「預ける－預かる」などのペアはヲ格と共に必ず着点二格を伴い、ガ格と二格の交替のみを許し、統語的受け身において主格に昇格するヲ格はそのまま保持される。その意味で、「見つける－見つかる」は〈動詞－語彙的受け身動詞〉の性格と〈能動－受動〉の性格を併せ持った特殊なペアとすることができると思われるが、この事実も通常の語彙概念構造からはずれた構造を持たざるをえない一因となっているのではないだろうか。

5. まとめ

語彙概念構造はさまざまな文法問題を解決するのに有効であるが、それには個別言語における特殊な語彙事情を考察する必要がある。その一方で、語彙概念構造はその個別語彙事情を探るにも有効である。

しかし、日本語動詞における自他ペアには、本来持っているべき構造と異なる構造を持っているものが多くある。つまり、意味と構造がズレ

をなしているペアが見られることが、「見つける－見つかる」の検討を通して明らかになった。「見つける－見つかる」のペアの場合、そのズレの要因は、①自動詞・他動詞のいずれが用いられる場合にも、必ず「経験者（発見者）」の介在が必要であること、②他動詞の場合、語彙概念構造の使役部分の働きかけ対象と、結果部分の変化対象がずれていること（[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE-AT z]]の y がずれている）、の2点にある。このような構造と意味のズレをなす自他ペア動詞は、他にもあるのではないか。

また、自他ペア動詞一般について言えば、一部の自動詞は非対格・非能格両用の用法があることが挙げられる。しかし、一見非能格動詞のように見えるこの用法は、再帰動詞と近似した構造になっているので、実は非対格動詞の再帰的用法かとも思われるが、その再帰性が意識されぬまま使われているので、我々は[注3]で述べたような混乱を起こすのではないだろうか。

さらに、非対格の用法でも脱使役・反使役の用法が幾つかの動詞に複雑に分岐している動詞が存在することである（注7参照）。

日本語の動詞には、語幹あるいは漢字部分が同じで形態的にも対応を感じさせる動詞ペアであるのに、通常の有対動詞の枠に収まらない変則対動詞が「見つかる－見つける」の他にもたくさんある。「照る－照らす」「化ける－化かす」¹⁵「含む－含める」「漏る－漏れる－漏らす」「つかまえる－つかまえる－つかむ」「どく－どかす－どける」「からむ－からまる－からめる」「くるむ－くるまる－くるめる」など、枚挙に暇がない。これらの動詞の意味の違いと語彙概念構造の違いについて、今後は研究を進めたい。

[参考文献]

影山太郎（2000）「自他交替の意味的メカニズム」『日英語の自他交替』

ひつじ書房

影山太郎 (2002) 『ケジメのない日本語』 岩波書店

須賀一好 (2000) 「他動詞形を派生する要因としての意味と形態－『照らす』と『化かす』」 丸田忠雄・須賀一好編 『日英語の自他の交替』
ひつじ書房

湯廷池 (2007) 「日本語の動詞と形容詞について」 『東呉日語教育学報第
30期』 東呉大学日文系

長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』 大修館書店

三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版

¹ 本稿は、2012年6月9日に行われた政治大学主催の国際会議「日語教育與日本研究之定位與展望」(台北)における口頭発表「有対動詞『見つける－見つかかる』の特殊性－語彙概念構造による分析－」を大幅加筆修正したものである。

² 「枝を折る」と「鶴を折る」の例は、影山(2000)から取った。しかし、影山は「鶴を折る」の「折る」が作成動詞に分類されることについては言及していない。

³ 台湾の日本語学術界に初めて生成文法を齎した輔仁大学客員教授湯廷池博士は、有対自動詞はあくまで非対格動詞である、という原則的な立場を堅持されており、「学生が立っている」の「立っている」や、隠れんぼをしている場合の「隠れる」も非対格動詞とされている(湯2007)。しかし、電車で老人に席を譲るために立つ行為や、隠れんぼの隠れる行為は、どうしても意志的行為としか思えない。「しばらく隠れていたい。」「あそこに隠れよう。」「隠れろ！」など、意志モダリティの文末表現に接続するのは自然だし、よく聞かれるからである。英語では「隠れる」はhide oneselfと言い、日本語にも「隠れる」と同様の意味の他動詞表現「身を隠す」があることから、日本語特有の再帰動詞にこの現象が多いことに気がついた。

⁴ 項の意味役割がThからAgに変わるのは、動作主が動作主自身に働きかける再帰動詞の場合のみであろう。

⁵ この場合、「客」は動作を受ける有情物であるので、Th(Theme)よりも被動者Pa(Patient)の項と考える方が適當ではないかと思われる。例文(5)[対格－非能格のペア]の「(人₂を)起こす」の「人₂」も同様に考えた。

⁶ 「命が縮む」に対して「命を縮める」という言い方があるが、好き好んで「命を縮める」人などいないことから、これは「息を切らせる」「目を輝かせる」などと同様の再帰的用法と言えよう。

⁷ それ故、「縮む・縮まる・縮める」は、tripletと言うより「縮める－縮まる」「縮める－縮む」のdouble binaryであると言えよう。これは、コソア指示詞が一見「近・中・遠」の三領域を表わしているようだが、実は「コーソ」「コア」のdouble binaryをなしているのと同様である(三上1970参照)。

⁸ 影山(2002)では、「ドアをあけたけどあかなかった」は正用とされている。

⁹ もちろん、「探し当ててください。」「探し出してください。」など、後部に結果を含む複合動詞ならば可能である。

¹⁰ 「はじめに」で述べたように、動作主xが直接働きかけるのは探している対象yでなく、yを見えなくしているy'と考える。

¹¹ 江戸時代天明年間、水田の耕作中に地元の百姓が偶然発見したとされる。金印は郡奉行を介して福岡藩へと渡り、儒学者亀井南冥は『後漢書』に記述のある金印とはこれのことであると同定したという。(ウィキペディア：フリー百科事典「漢倭奴国王印」)

¹² 取り消し線文字は、結果をもたらした元の動作、つまり使役部分が背景化されていることを表わす。

¹³ Experiencer (経験者) は、Agent と同様、有情物の行為であるが、意志や意図を持たないコントロール不可の行為であると考えられている。これらの例の「見つける－見つかる」の発見者は発見の意志を持たず、対象を偶然眼にしたので、Experiencer と考えられる。

¹⁴ 通常の Experiencer の扱いは、例えば生理動詞「くしゃみをする」では [x EXPERIENCE [x BE-AT z]] である。

¹⁵ 「照る－照らす」「化ける－化かす」については、須賀 (2000) の先行研究がある。

Irregular Pair-verbs in Japanese — Focusing on "Mitsukeru-mitsukaru" —

Different from the regular pair-verbs in Japanese, the irregular combinations are very common. Similar to “ireru-hairu” and “okosu-okiru”, as in pairs, the same intransitive verbs can be used both as unaccusative verbs and unergative verbs. Resembling “chijimeru-chijimaru-chujimu”, one accusative verb can be viewed as the unaccusative verb of professional de-causativization and unaccusative verb of professional anti-causativization in triplet.

“Mitsukeru-mitsukaru” is one of the irregular pairs and its Lexical Conceptual Structure is different from the usual pair-verbs. For one, among the usages of the accusative verb “mitsukeru,” “a lack of causative” part can be found. Secondly, for its Lexical Conceptual Structure, there is an argument of Experiencer. Lastly, the relation between “transitive and intransitive” verbs remains the same: it is still “active and passive” verbs. The reason why it stays invariable from other

pair-verbs is that it takes an observer for “mitsukeru-mitsukaru” to bring about its meaning.

Although it is effective to solve various grammatical problems via Lexical Conceptual Structure, many Japanese verbs have a twist between their meanings and their structures. Hence, it is essential to take it into consideration that different languages have their own special lexical conditions.

國科會補助計畫衍生研發成果推廣資料表

日期:2012/11/27

國科會補助計畫	計畫名稱: 日語中的「 」與「 」－尋求日本語學與哲學的接點
	計畫主持人: 吉田妙子
	計畫編號: 100-2410-H-004-179- 學門領域: 語意學
無研發成果推廣資料	

100 年度專題研究計畫研究成果彙整表

計畫主持人：吉田妙子		計畫編號：100-2410-H-004-179-				計畫名稱：日語中的「モノ」與「コト」－尋求日本語學與哲學的接點	
成果項目		量化			單位	備註（質化說明：如數個計畫共同成果、成果列為該期刊之封面故事...等）	
		實際已達成數（被接受或已發表）	預期總達成數（含實際已達成數）	本計畫實際貢獻百分比			
國內	論文著作	期刊論文	0	0	0%	篇	
		研究報告/技術報告	0	0	0%		
		研討會論文	1	1	100%		
		專書	0	0	0%		
	專利	申請中件數	0	0	0%	件	
		已獲得件數	0	0	0%		
	技術移轉	件數	0	0	0%	件	
		權利金	0	0	0%	千元	
	參與計畫人力（本國籍）	碩士生	1	1	100%	人次	
		博士生	0	0	0%		
博士後研究員		0	0	0%			
專任助理		0	0	0%			
國外	論文著作	期刊論文	0	0	0%	篇	
		研究報告/技術報告	0	0	0%		
		研討會論文	0	0	0%		
		專書	1	1	100%		章/本
	專利	申請中件數	0	0	0%	件	
		已獲得件數	0	0	0%		
	技術移轉	件數	0	0	0%	件	
		權利金	0	0	0%	千元	
	參與計畫人力（外國籍）	碩士生	0	0	0%	人次	
		博士生	0	0	0%		
博士後研究員		0	0	0%			
專任助理		0	0	0%			

<p>其他成果 (無法以量化表達之成果如辦理學術活動、獲得獎項、重要國際合作、研究成果國際影響力及其他協助產業技術發展之具體效益事項等，請以文字敘述填列。)</p>	<p>無</p>
--	----------

	成果項目	量化	名稱或內容性質簡述
科 教 處 計 畫 加 填 項 目	測驗工具(含質性與量性)	0	
	課程/模組	0	
	電腦及網路系統或工具	0	
	教材	0	
	舉辦之活動/競賽	0	
	研討會/工作坊	0	
	電子報、網站	0	
	計畫成果推廣之參與(閱聽)人數	0	

國科會補助專題研究計畫成果報告自評表

請就研究內容與原計畫相符程度、達成預期目標情況、研究成果之學術或應用價值（簡要敘述成果所代表之意義、價值、影響或進一步發展之可能性）、是否適合在學術期刊發表或申請專利、主要發現或其他有關價值等，作一綜合評估。

1. 請就研究內容與原計畫相符程度、達成預期目標情況作一綜合評估

達成目標

未達成目標（請說明，以 100 字為限）

實驗失敗

因故實驗中斷

其他原因

說明：

2. 研究成果在學術期刊發表或申請專利等情形：

論文： 已發表 未發表之文稿 撰寫中 無

專利： 已獲得 申請中 無

技轉： 已技轉 洽談中 無

其他：（以 100 字為限）

3. 請依學術成就、技術創新、社會影響等方面，評估研究成果之學術或應用價值（簡要敘述成果所代表之意義、價值、影響或進一步發展之可能性）（以 500 字為限）

在撰寫的過程之中，不斷的去修正此計畫的可能性，最終發現到語學與哲學是密不可分的。如果沒有經歷過哲學的思辯過程，就無法想出這一連串的语言機制。在看似簡簡單單二分法的日語自他動詞的型態下，卻隱藏著一連串所謂的連續性，這一點，單就喬姆斯基的生成文法理論是無法解釋全部的現象的，在輔以哲學的思維之下，最終得到這樣的一個研究成果。